

小笠原で暮らすイルカたち～#118（フック）と仲良しなオス～

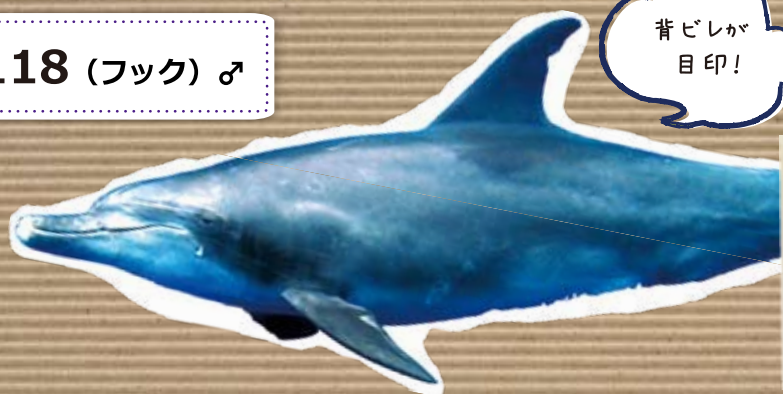
ミナミハンドウイルカは、群れのメンバーが集まったり離れたりを繰り返す、「離合集散」とよばれる群れのパターンを持ちます。御蔵島のミナミハンドウイルカでは、主に若いオスで構成される群れと、母親メスと子どもを含む群れがよく見られるそうですが、その群れ構成の中で、オスはある程度決まった個体と行動を共にする傾向があるという報告があります。では、小笠原でもそのような傾向が見られるのでしょうか。

今回は、まずは手始めに、ここ3年間（2017～2019年）のイルカ調査で一番多く観察されたオスの個体が、どのオスの個体とよく一緒にいたのか（同伴）を調べてみることにしました。

最近3年間で最も観察されたオスの個体は、#118（フック）でした。彼が観察された回数は22回であり、

同伴が確認された個体のうちオスと識別できているものは22個体でした。そのうち、#273（モグオ）と#337（凹み君）との同伴が確認された回数が最も多く、それぞれ10回と全体の約半分の回数となりました。その次に多かったのは、#49（シロマユゲ）、#297（パイ）、そして#321（Bライン）の7回であり、続いて、#87（ペコ）と#224（ひょうたん）との同伴が6回という結果となりました。どうやら、#118はこの辺りのオスと一緒にいることが多いようです。#118と同じ群れで観察されたのべ22個体の中には、1回や2回しか同伴が確認できなかった個体もいたため、小笠原においても、オスが同伴する個体にある程度偏りがあるのかもしれませんが。今後、他の個体も含め、それぞれの個体同士の関係を調べていきたいと思っています。

#118（フック）♂

背ビレが
目印!

2017年、2018年と最もよく出会った個体。特徴は、背ビレの「く」の字の欠損。2005年から観察されており、親離れを確認してからは11年が経過した。

#118（フック）と仲良しなオスたち

#273
（モグオ）♂

左右の口元に切れ込みがあり、特に左側にはミニエボシが付着しているのが識別のポイント。背ビレはきれいなため、船上から識別するのは難しい。2011年から確認されている。

#337
（凹み君）♂

イルカ通信では初登場。背中の方の後ろの方に深い凹みがあるのが名前の由来であり、大きな特徴。背ビレにも特徴的な切れ込みがある。2017年から識別されている。